

## インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー

### —— 枠組み再建のスケッチ ——

後 藤 敏 文

1. 我々が考えた内容を文として表現する場合、文の外形（文法）がどれだけの意味要素を区別して表示できる手段・装置を備えていれば足り、また、合目的であるかということになると、人類のどの言語においても、おおよそ同じような中味と総量とが期待されるであろう。余り装置（ハードウェア）自体が厳密・正確で細分され過ぎていると、使いこなしにくいし、かえって達意的でなくなる。逆に、現実日々用いるかどうかは別としても、ある程度厳密に捕捉し区別する手段を欠いていれば、言語文化は成立し難い。どの言語も最終的には同じような道具立て（またはその可能性）をもっているからこそ、翻訳という営みも可能であり、例えば、哲学という思惟活動の一分野を共有し、その分野の中では異なった母（国）語を使用する人々の間でも共通の理屈を追うことができ、また共通の筋道・ルールに基づいて議論・交流することができるのであろう。しかし、それら必要にして合目的な諸カテゴリーの区別を、どのような文中の形態・要素、文法カテゴリーに担わせるか、ということになると、言語によって出入りがある。ある言語では、主語が単数か複数かという区別を、専ら主語の部分で表示するかもしれないし、述語部分で表示する言語もあろうし、両方において表示するかもしれない。場合によっては副詞的要素を用いることもあろう。表示の仕方も「活用」と呼ばれるような、あらかじめ単数か複数か決まっていなと表現できないような形式もあり、必要な時にのみ付加すれば足りる形式もある。また、それら両極の間に位置するような多様な中間的な姿を示す言語もあろう。そうした相違は同一言語の歴史的諸発展段階の間にも見られる。

我々のことばによる表現の中核をなすのは、一般に、「述語」の部分であり、この部分が文中の他の構成要素間の関係をとりと定める。更に、述語部分は話し手の文の中味、情報に対する態度表明をも含む。この「態度表明」によって、文の中味が「報告」されたり、「希望」や「命令」であることが理解されて、宙に浮かないのである。例えば、文脈・場が設定されていない状況で、突然Aが『(明日) 雨が降る』と言ったとする。聞き手であるBはAの意図が解らなくて不気味に思うであろう。終止形は話し手の態度表明を含まないか、たとえ含んだにしても極く弱いものだからである。

『(明日) 雨が降るよ』と「よ」が加わっただけで、AがBに新しい内容を「報告」していることが理解され、Bはそれに相応した注意を喚起されてAの意図を(何らかの形で)了解するのである。

「述語」や「動詞」を定義しないまま、更に話を進める。この、述語部分が持っている、文の諸要素を統括し、話者の態度表明で包んで聞き手／読み手に渡す、という性格も、概ね人類の諸言語に共通すると思われる。その述語部分のハードウェアがどうなっており、どのような構成要素と構造によって述語部分の機能が果たされるか、という具体的様相となると、各言語間の差異は大きい。ここでは、現代日本語や英語などかなり異なった言語の一典型として、インド・ヨーロッパ祖語の動詞組織の構成を見ることにより、言語という基本的文化行為を考えるきっかけとして頂けたらと思う。

2. インド・ヨーロッパ語族(以下簡略の為、印欧語族とよぶ)と総称される言語のグループには、現代語でいえば、インドとイランのアーリヤ系諸語と、以下のヨーロッパの諸言語とが含まれる:ギリシャ語;フランス・イタリア・スペイン・ポルトガル・ルーマニア等のロマンス諸語;アイルランド・スコットランド・ウェールズ・ブルターニュ等のケルト諸語;英語・ドイツ語・オランダ語・北欧諸語等のゲルマン諸語;ロシア語を始めとするスラヴ諸語、リトウアニア・ラトヴィアのバルト諸語;アルメニア語;アルバニア語など。これらの言語——それに、死語となったアナトリア諸語(ヒッタイト語など)、トカラ語(中央アジアのアグニとクチャの言語)などを含めて——は、結論から言えば、一つの具体的な言語から派生した諸々の発展形であり、その基礎となった言語をインド・ヨーロッパ祖語(印欧祖語)とよぶ。印欧語族は各語派に分かれて後、それぞれ独自の歴史を辿り、しかも古い時代から連綿と文献を残してきたため、言語研究の対象としては極めて有利な条件をもっている。音韻対応という横糸、音韻法則という縦糸を基盤とした「比較」という方法により、文献学的研究・歴史的考察と支えあって、「印欧語比較言語学」という学問分野を成立させた。その結果、我々は印欧祖語をかなりの程度「再建」できるに至っている。印欧祖語というときには、比較によって直接再建される、分派直前の言語の状態を言う。従って、所謂 synchron(同時的/共時的)な姿である。勿論、祖語自体にも前史があった筈であり、個々に推定される事項もあるが、前史は比較を手段とした再建によって辿ることはできない。そこでは、現代の各個別言語や、孤立言語を扱う場合のように、再建された祖語そのものを対象にして、各要素間の synchron な構造分析に頼るしかない。この手続きを「内的再建」innere Rekonstruktion とよぶことがある。

再建された印欧祖語の動詞組織がどのようなものであったかについては、1970年代から挑戦的理論が提出されて、伝統的理論から発展してきた見方に情熱的に対抗しようとした。伝統的見解は、事実上、インド・イラン語派(言語の担い手の自称に基いて「アーリヤ語派」ともよばれる)の動詞組織とギリシャ語派の動詞組織とを基本に据える。両語派のもつ文献(リグヴェーダ、アヴェスタ;ホメロスなど)の格段の古さもあって、両者は互いに似ており、そこから、かなり複雑ではあるが整合性のある動詞組織が再建される。また、これから、より後に在証される他の語派の動詞組織の発展

(継承・簡略化・融合・改編・再組織)も比較的直線的に導き得る。この立場の描く言語像をアーリヤ・ギリシャ型 arisch-griechisches Modell, gräko-arisches Modell とよぶことがある。これに異論を唱える立場は、今世紀になって発見されたヒッタイト語文書が、年代の古さ(文献そのものの年代はアーリヤ語派の個別文献より何百年か古い)にもかかわらず(主張者にとっては年代の古さ故に)、大変簡略な組織を示すことに基づき、これをより古い姿と見て、アーリヤ・ギリシャ型を後の発展形であるとするものである。ヒッタイト型 hethitisches (anatolisches) Modell, さらには、ずっと後のゲルマン語派の動詞組織に類似する点のあることから、ヒッタイト・ゲルマン型 hethitisch-germanisches Modell とよばれる。前者の伝統的見方を、「再建」手続きを中心に据えて発展させ、その立場を明瞭に代表するのは Erlangen の K. Hoffmann (特に, Aufsätze zur Indoiranistik II, Wiesbaden 1976, 523 - 540 = Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 28, 1970, 19 - 40) であり、後者の主唱者は W. Meid (Innsbruck) と E. Neu (Bochum) である(例えば Hethitisch und Indogermanisch, Innsbruck 1979 中の両者の論文を見よ)。

本稿は前者の立場に立ち、第二の仮説には言及しない。第二案では具体的な再建形が提出されず、例えば、インド・イラン語派やギリシャ語派では完全に生きており、アナトリア語派を除いた他の語派においても程度の差こそあれ存在が前提とされる Optativ (願望法)が、どこから何に基づいて発生したのか、全く説明できないからである。Optativ に限らず、以下に言及する形態カテゴリーの多くは Ablaut (母音交替)が作用した(後の)姿を示しており、その構成要素が原理的に Ablaut 以前に存在していたことを示唆する。Ablaut は印欧祖語以前の段階で働いた現象であるから、ヒッタイト型のモデルから出発するとしたら、大変複雑な仮定の、多層に互る連鎖を考案しなければならないであろう。(かれらが具体的な形を扱う場合には、伝統的というよりもむしろ保守的な知見に依ることが多い。)

Ablaut は、一つの単語がそのメルクマールとして<sup>(1)</sup>一つのアクセントを保持する、という原則の下に、諸々の独立要素が合成されて、屈折型の言語が成立していく過程で起きた現象が基になっていると考えられる。その際、アクセントの保持された音節ではその母音(\*eが圧倒的多数、稀に\*a, 極く稀に\*o)が保持され(Vollstufe「盈階梯・強階梯・標準階梯」)、それ以外では消滅したり(Nullstufe「ゼロ階梯」, Schwundstufe「弱階梯」)、\*oに変化したり(o-Stufe「o-(強)階梯」)した。さらに、意味機能を担った延長母音\*ē, \*ō等も発生したものと考えられる(Langstufe「長階梯」, Dehnstufe「延長階梯」)。

我々は、例えば、トンド<sup>(2)</sup>の翅と鳥の翼とを機能的ないし類型的に比較することから出発するのではなく、それがどのような基礎部品から成り立ち(トンドなら表皮、鳥なら前肢)、発達してきたかを問題にするのである。この点に関し付言するなら、発生的には異った諸言語からなる、例えばバルカンの諸言語を、類型論的に扱う際に有効である Sprachbund (言語結束・言語圏)という概念も、印欧語比較言語学においては、極く限られた局面でしか機能しない。Sprachbund というような見方が有効なのは「飛ぶ」という機能・類型を問題にする場面においてである。翅、翼、プロペラ等、部品の

ハードウェアの分析は全く別次元の営みである。

**3.** 文法を扱う際には、語形の形態分類に関わる平面と、意味の平面とを、区別する必要がある。前者を文法カテゴリー grammatische Kategorie(n), 後者を意味的カテゴリー noematische Kategorie(n) と名付ける。意味的カテゴリーにも諸次元がある。文法の検討に際しては、直接的には、各文法カテゴリー（文法要素、例えば、語尾の一つ一つ、接尾辞、語根）のそれぞれが表示する意味、即ち「機能」が問題となる。ただし、それも一様の出来事ではない。例えば、「食べる」を意味する動詞語根があるとする。動詞語根の機能は一般共通レベルでは「動作」の表示である。「動作」の下位概念のうち「食べる」は「状態」等ではなく、「行為」の範疇に属する。これらは既に「食べる」という語彙の意味に含まれる意味要素である。更に、「食べる」の具体的意味内容においても、瞬間的動作か持続的か、意図的な行為か自発的か、目的語を（どの程度）必要とする行為か、といった動作一般に共通する性質分類軸で測られる意味要素がある。「食う」、「食らう」、「食む」、「頬張る」、「召し上がる」、「噛む」、「嚙み下す」、「かき込む」等々の同類の動詞との区別が文法のレベルに顕在化し得ることをも考慮しておかねばならない。目的語にあたるものが固形物か流動体か…の区別が働くかもしれない。上品—中立—卑属といった分類軸で測られることもあろう。これらの意味要素 (das Gemeinte 「意図されたもの」) すべてを Koschmieder-Hoffmann の定義を基に noem 「意味要素」とよぶ。諸々の noem は、常に必然的に伴う、特別な条件がなければ常に意図される、条件によって顕在化する、等々の有意性 Relevanz の序列の中にある。

**4. 1.** 語彙自体の持っている性質 A : Aktionsart 「活動様式」

動詞語根が表示する語彙内容 lexikalische Bedeutung を総称して「動作」Handlung とよぶことにする。それぞれの動作は、それが時間軸の中でどのような時間的広がりを持って起こるか、によって区別される。これはそれぞれの語彙の意味に本性上、事物的・自然的に備わった性質である。

(1) 基本的時間軸として、

瞬間的 punktuell ←-----短時間的 momentativ -----→持続的 durativ

を考える。例えば、「歩く」という「動作」は始点をもたず、時間の幅をとり、かつ、理論上いつまでも続けられるので、持続的 durativ な Aktionsart をもつ。「歩いているよ」と言う場合には、話者が観ている現在の一点が、歩くという動作の行われている時間的広がりの中に入っていることを意味する。「歩くよ」では、時間の広がりには有意的 relevant ではなく、主として主語に固有の性質を指摘するか、「ほら、これから」という近接未来などを意味しているであろう。「稲光がする」という「動作」は時間的広がりを持たないので瞬間的 punktuell である。「稲光がしているよ」と表現するときには、現在の一点で見て丁度その瞬間が稲光の一回の閃きの持続中に位置している訳ではなく、「さっきから、繰り返し」という反復の意味で用いられることが多い。「稲光がするよ」は「ほら、今か

ら」という近接未来であり、この場合には、動作の *punktuell* な性格自体はそのまま有効であるが、現在からは外れている。日本語はじめ多くの達意的な言語ではこれらの表現の背後にある、動作の時間軸的性質の変更（「稲光がしているよ」では繰り返し *iterativ* という性質に変わっている）や近接未来への時の変更は形態に現れないので、取り合えず問題にならないであろう。印欧祖語の場合には転化がそのまま形態に反映するので、反復を表現する語幹ないし未来を表す語法に置き換えねばならない。この時間軸という座標はあくまで相対的なスペクトルであり、「歩く」や「稲光がする」のような明瞭な両極に位置する「動作」のほかに、その中間に無数の「動作」が相対的に位置するわけである。そのどの位置に区分けの線が入るかもあらかじめ決まっているわけではなく、相対的にずれ得る。便宜的に、短い時間かかる「動作」の為に短時間的 *momentativ* という項を設定しておく。

(2) 第二の時間軸として、「動作」に始点があるか（例えば「来る」）、終点があるか（例えば「到着する」）という性質を考慮する：

有限的 *terminativ*：有始点的 *anfangsterminativ* と有終点的 *endterminativ*。

(3) 次に、二次的な、階上の性質として、先に稲光りの例でみた反復 *iterativ* 等がある。*iterativ* には語彙にもともと含まれるもの（例えば「擦る」、「震える」）と、もともと *durativ* であったり *punktuell/momentativ* である語彙を反復させるもの（「行き来する」、「考えに考える」、先の「稲光がしている」の背後で起きていることなど）、さらにその中間的なものがある。必要の度合いは一樣ではなく、また、より正確に把握・定義しなおさねばならないが、*inchoativ* 「起動的」（～しはじめ）、*ingressiv* 「開始的」（動作 [行為・状態] に入 [って] いる）もここに設置しておくべきであろう。伝統的に、それぞれ、現在語幹のある種の形成法と、アオリスト語形の機能のある種のもの、について用いられてきた用語である。

#### 4. 2. 語彙自体の持っている性質 B：(innere) *Verhaltensart* 「(内的) 動作様態」

動词语根（または語幹形成法によって変化を受けた語幹）の意味が「行為」か「推移・経過」か等の区別によって異なる語尾系列をとったり、異なった語幹を形成したりすることがある。この次元の区別として、

(1) *facientiv* 「行為的」……… *fientiv* 「推移的」……… *stativ* 「状态的」  
を建てる。(ただし、一般の「状態」は *fientiv* に含め、*stativ* を特殊な場合に限定した方がよいように思われる。今後の課題である。) これに

(2) 意図・意志・努力の関与のある ←……→ なし  
が密接にかかわるように思われる。術語の作成は省略するが、一般に、意図・努力が関与する場合は *facientiv* に、そうでない場合は *fientiv* に準ずる。将来このカテゴリー平面を積極的に区別して建てるべきかも知れない。

(3) *faktiv* 「使役的」； *patientiv* 「受け身的・受動的」

は動作様態の二次的、階上カテゴリーである。

**4. 3.** 語彙自体の持っている性質 C : (äussere) Verhaltensart 「(外的) 動作様態」または Reaktionsart 「支配様態」

他動詞的 transitiv ←-----→自動詞的 intransitiv

という座標軸も、もともと語彙自体の意味の中に存する性質であり、Syntax 「統語論」のレベルで [(直接) 目的語を必ず取る] ←-----→ [全く取らない] という両極と、その相対的中間項として、格支配の現象として実現・顕在化する。他動詞の絶対用法 (本来他動詞と判断しうる「蹴る」を用いて、「馬は人・ものを蹴る」, 「馬は蹴るという性質を持つ」の意味で「馬は蹴る」というような場合) はこのことと絡んで事態を複雑化するが、印欧祖語の動詞形態論においては他動詞・自動詞の区別は上記の「(内的) 動作様態」 Verhaltensart に比較してそれほど積極的な役割は演じないようである。

**5.** アスペクト Aspekt 「観」と所謂二大「時制語幹」 Tempusstamm

印欧祖語の動詞組織の大きな特色として、二つのアスペクトを区別し、それぞれに対応した、相互に対立する動詞語幹を形成することが挙げられる。Aspekt は元来「見方・観方」程の意味で、「動作」を進行中の相、時間の広がり・流れの中で観るか、時間の広がり・流れをなくして、「動作」全体、「動作」そのものの起こる起こらないに注目して観るか、という区別である。E. Hermann の定義に従えば、ドイツ語で、前者を Verlaufsschau 「途中 (経過・進行) 観」、後者を Gesamtschau 「全体観」とよぶ。伝統的には前者は imperfektiver Aspekt (「未完了相」と訳される)、後者は perfektiver Aspekt (「完了相」と名付けられるが、文法カテゴリー (形態) としての Imperfekt, Perfekt とは全く重ならないので、誤解の基になり、紛らわしい。かつまた、「完了相未来」などという、未来完了を想起させ、「動作」を未来の時間の視点で、終わった方向から戻って観ているように思われるが、謂うところは、将来その「動作」全体がそもそも起こるといふことにあるのであるから、ふさわしくない。infektiver Aspekt と konfektiver Aspekt という命名 (例えば Schwyzer/Debrunner, Griechische Grammatik II 252) が推奨される。

混同されることが多いが、はっきり確認しておかねばならないのは **4. 1.** に見た Aktionsart との区別である。どちらの概念も時間の広がりに関係し、従って次項に見る如く、ある程度の相互関係が存在するが、Aktionsart は語彙の意味内容 (「動作」そのもの) に備わっている性質であり、アスペクトは語形を用いて表現する場合に「動作」を捕らえるものの観方の二通りの可能性であり、表現レベルの差を支配するものである。

「動作」を「途中観」で表現する場合には現在語幹 Präsensstamm が用いられ、「全体観」にはアオリスト語幹 Aoriststamm とよばれるものが使われる。両語幹と、後に **7.** で言及する完了語幹 Perfektstamm とを合わせて、Tempusstamm 「時制語幹」と総称する。(「アオリスト」という語

は元来「限定されない」を意味するギリシャ語で、伝統文法の用語をそのまま借用したものであるが、単なる記号として理解すべきである。同様に Tempus [複数 Tempora] 「時制」もラテン文法の用語であり、印欧祖語の実態にそぐわない。語の意味する「時」の概念は理解の外に置いておくべきである。) 現在とアオリストの両語幹は、むしろ、「アスペクト語幹」と名付けるべきであろう。両組織は歴史的に在証されるインド・イランの古層の言語や、ギリシャ語では、完全に生きているとは言いきれないまでも、かなりの程度残存している。最も例示的なものを挙げる。古インド・アーリヤ語(所謂サンスクリット)では *mā* という否定辞の一種と Injunktiv (仮に「言及法」とする。日本語の終止形を想起させるような、話者の態度表明を含まない、中味だけの裸の形である。→ 8.) (1) を用いて禁止を表すが、その際、現在語幹の言及法が用いられると、今現に進行中の動作の禁止、つまり中断の要請(～しているのを止めてくれ)の意味になり、全体観を表すアオリスト語幹の言及法が用いられると、そもそもその動作の起こることの禁止、つまり防止(～しないでくれ)が意図される。ギリシャ語では、この場合に *mē* + 命令法 Imperativ (など) が用いられる。プラトーンの『ソクラテースの弁明』において、弁者ソクラテースは聴衆が騒ぎだす前に、よく聞いてほしいという意味では、アオリスト語幹の命令法を用いて *mē t<sup>h</sup>orubēsete* 「君達は騒がないでくれ」と言い (20e), 弁論が進行して聴衆の間に波紋が起ると、今度は現在語幹の命令形で *mē t<sup>h</sup>orubeite* 「君達は騒ぐのを止めてくれ」と言う (21a, 30c)。この例は、ギリシャ語で、本来禁止に使用されていた Modus 「法」(言及法) が失われた後まで、アスペクトの観念(「全体観」と「途中観」の区別)が、一部にははっきりと残り、固定されていたことを示している。

## 6. Aktionsart とアスペクトの関係・連動

アスペクトの差は「動作」の捕らえ方・観方の差であるが、「動作」そのものが持つ時間軸的性質である Aktionsart 「活動様式」との関連で、制約を受けるところがある。先に挙げた例を用いる。「稲光がする」は明瞭に瞬間的 *punktuell* な Aktionsart をもっているもので、時間的広がりを含象した観方(全体観)において表現される場合には全く問題がなく、そのままアオリスト語幹として機能し、直接、人称語尾が付加される。「歩く」は明瞭に持続的 *durativ* であるから、「途中観」とはよく相即し、そのまま現在語幹として機能する。問題は「稲光がする」を「途中観」で、「歩く」を「全体観」で表現したい場合である。結論から言うと、(a) *punktuell* または (b) *durativ* な性質が強すぎる場合には、(a) 現在語幹または (b) アオリスト語幹は作れない。言語表現のシステムの要請で、活用表 Paradigma の中のその部分を埋めなければならない時には、別の動詞語根に補ってもらおう。「稲光がする」だったら、例えば「光を放つ」といった語根に現在語幹(「光を放っている」)を担当してもらおう。「歩く」であれば「動く」とか「踏む」からアオリスト語幹をつくってもらおう。このようにして一つの活用表を分担・補填しあう現象を Suppletion または Suppletivismus 「補填・補充」といい、そのようにして組み立てられた活用表を Suppletivparadigma とよぶ。Suppletion にも厳密

なものから緩いものまで段階がある。また、Suppletivparadigmaを形成する語根Aと語根Bとがお互いに半人前で、両者で過不足ない一つの活用表を成している場合もあれば、AはAで現在語幹もアオリスト語幹も持っていないながら、例えば現在形(=現在語幹の活用形)はもはや生産的ではなく、普通にはBが代理するという例も見いだされる。また、現在語幹/アオリスト語幹自体の内部でも、ある活用形や、あるModus「話法」が別の語根から補われたり、完了語幹や名詞派生形などをも含めて、複数、時には3つ以上の語根が一つの活用表を形成するに至ることもある。歴史的な言語段階では音韻変化の結果、分かりにくくなった語形を避ける為に補填が起こることもある。最も有名なSuppletionの例は「ある、存在する」を意味する動詞に見られる：3人称単数現在直接法 $*h_1és-ti$ (>古インド  $ásti$ , ギリシャ  $estí(n)$ , ラテン  $est$ , 現代ドイツ  $ist$  などなど; 語根 $*h_1es$ 「ある、存在する」), 3人称アオリスト過去直接法 $*é-b^huh_2-t$ (>古インド  $ábhūt$ , ギ  $ép^hū$ , または $*é^b^huh_2-t$ , cf. リトウニア  $buvō$ , 古アイルランド  $ba$ ; 語根 $*b^huh_2$ は本来「なる」を意味する語根)。英語の  $be$ ,  $is$ ,  $was$  など最終的にはこの現象に遡る( $was$ は「夜を過ごす」を意味する, 古インドの  $vas$ に当たる語根に由来)。現代ドイツ語の  $gehen$ ,  $ging$ ,  $gegangen$  は3つの異なる語根から成る。

以上、語根の持つAktionsartが強度にpunktuell/durativである場合を見た。Aktionsartがそれほど両極に寄らず、時間軸のスペクトルの、より中央部に位置するような「動作」の場合には、その本来の時間軸の性質を、いわば、引き延ばしたり縮めたり加工して、現在語幹やアオリスト語幹を作る。この「加工」の役割をするのは、主として、(時制)語幹形成接尾辞(Tempus-)Stammsuffixである。以下、例によって見る。

(1) 古インド語(「サンスクリット」)で「歩いて行く」を意味する代表的な現在語幹は  $gáccha-$ である(3人称単数直接法は  $gácchati$ )。この形は印欧祖語の $*g^w\eta-ské-$ に遡る。ギリシャ語にも2人称単数・複数の命令形から間投詞になった  $báske$ ,  $báste$ 「行け, (おまえたちは) 行け」が残っている(印欧祖語の $*g^w$ はギリシャ語のこの音韻環境下では  $b$ になる); 更に、リトウニア語  $gimstu$ 「私は生まれる」。語根は $*g^wem$ で、もとの意味は「踏みしめる」と推定される。この意味はギリシャ語の名詞  $básis$  < $*g^w\eta-tí-$ 「床, 土台, 基盤」に残っている(「歩み, 行程」をも意味するが、動詞、具体的には現在語幹、の意味に由来する; 古インド語の  $gáti-$ 「行方, 行程, 帰趨」も同様。無論  $básis$ は借用によってラテン語を経由し、最終的には英語の  $base$ へ連なる); また、ギリシャ語  $batēr$ 「基盤, (おそらく踏み板形式の) 敷居」< $*g^wem$ 「踏みしめる道具」をも参照せよ。語根の意味のAktionsartは瞬間的punktuell(ないしそれに近い短時間的momentativ)であったと考えられ、語根はそのままでアオリスト語幹として機能した: 例えば過去直接法3人称単数なら $*é-g^wen-t$  < $*é-g^wem-t$ , これから>古インド  $ágan$ 。現在語幹を形成する接尾辞 $*-ské-$ の機能は未だ完全には研究されていないが、伝統的に「起動的」inchoativ(4.1.(3))と説明されている。この説明が正しければ、「踏みしめる」が接尾辞の力で「踏みしめる動作を起こす」といった意味に転化せられ、ジ



ジェスチャーを言葉に移したような、動作のなぞりによって「歩く、行く」が表現されたものであろう。その際、「踏みしめる動作を起こす」は現在語幹、すなわち、「途中観」で表現できるような、時間の広がりをもったものと捕えられていたことになる。筆者は\**-ske-* 現在語幹の機能の本質的な要素の一つに、意図的ではない、自然発生的な、ないし、経過的な (→ **4. 2.** (1)–(2)) 動作を表示する働きがあったと推測している。

古インド語のアオリスト *ágan* は音韻法則に忠実には従っていない。期待される形は *g* の硬口蓋化を経た \**ájan* であり、古イラン語の一つ、アヴェスタ語のアオリスト語幹 *jam-* がまさにそれである。*g* は現在語幹の *gáccha-* によって平均化されたものである。逆に、アヴェスタ語の現在語幹は期待される \**gasa-* ではなく、アオリストの影響で、*jasa-* となっている。意味的にも、インド・イラン語のアオリスト語幹ではもはや「踏みしめる」は積極的意味要素としては有意的 *relevant* ではなく、いわば「歩いて行く」の時間的広がり無し対となっている。

(2) 似たような例は語根 \**g<sup>w</sup>ah<sub>2</sub>* (\**g<sup>w</sup>eh<sub>2</sub>*) 「股を一歩開く、跨ぐ」にも見られる。Aktionsart は *punktuell* (ないし *momentativ*) で、そのままアオリスト語幹として用いられる: \**é-g<sup>w</sup>ah<sub>2</sub>-t* > 古インド *á-gā-t* (アヴェスタ *gāt*)、ギリシャ *é-bē*。現在語幹は事実上「歩む、歩いて行く」を意味するが、本来は、繰り返し (→ **4. 1.** (3)) を意味する語根重複を伴って \**g<sup>w</sup>i-g<sup>w</sup>oh<sub>2</sub>-* (古インド *jíga-ti*, cf. ホメロス *bibás*) または \**g<sup>w</sup>é-g<sup>w</sup>oh<sub>2</sub>-* (古インド語 *jágat-* 「動き回るもの、生物界、世界」に痕跡が残る) である。つまり、「歩む、行く」がここでも「ジェスチャー」によって「繰り返し跨ぐ、何度も何度も跨ぐ動作を繰り返す」と表現されたのである。語根のもとの意味はギリシャ語 *bēma*, *bāma* 「歩み、(尺度の単位としての) 一歩、(階) 段、演壇」、そしておそらくアヴェスタ語 *gāman-* 「歩、歩み」 < \**g<sup>w</sup>ah<sub>2</sub>-men-*、ギリシャ語 *bēlós*, *bālós* 「(跨ぐ形式の?) 敷居」に残っている。

持続的 *durativ* な意味での「行く」は古インド語 *é-ti*、ギリシャ語 *eī-mi* 等々のもとになった \**h<sub>1</sub>ej* である。語根自体が *durativ* な意味をもっているから、現在語幹には接尾辞の力を借りずに語幹がそのまま用いられている (*athematisches Wurzelpräsens* 「非母音幹語根現在」)。アオリスト語幹は作れず、語根 \**g<sup>w</sup>ah<sub>2</sub>* のアオリスト (*athematischer Wurzelaorist* 「非母音幹語根アオリスト」) が補填する。

(3) (2) に似た形成法として \**poh<sub>3</sub>* (\**peh<sub>3</sub>*) 「ゴクリと飲み込む」(cf. アオリスト語幹 \**poh<sub>3</sub>-* : 古インド語に生産的、ギリシャ語にも存在したことが想定される) から作られた現在語幹 \**pí-ph<sub>3</sub>-e-* > \**pí-bh<sub>3</sub>-e-* (*p* は *h<sub>3</sub>* と表示される有声喉頭音に同化されて有声音 *b* に変化) > インド *píba-ti*、ラテン *bibit* (\**pibit* を経て)、古アイルランド語 *ibid* (語頭の *p* が消滅するのはケルト語派の特徴)。「(固形物等を) 食べる」と区別して「(液体を) 飲む」を「ジェスチャー」で表現することを思い描けば「ゴクゴク飲み込む」は明快であろう。

逆に、本来持続的 *durativ* な意味を持つ語根を (補填関係 *Suppletion* によらず) アオリスト語

幹を用いて（「全体観」で）表現する必要がある時にも、それに合わせて加工する接尾辞を用いる。その種類は現在語幹用の接尾辞や形成法ほど多くはない。主たるものは -s- という Suffix である。詳しくは→**11.** 4., **11.** 5. 2.。例は省略する。

### **7.** 完了語幹 Perfektstamm

以上見てきた現在（語幹／組織）、アオリスト（語幹／組織）と並んで、通常「時制」（時制語幹、時制組織）Tempus（Tempusstamm, Tempusssystem）と総称されるものに、もう一つ、完了 Perfekt がある。これは、印欧祖語では、「到達・達成した状態」Nakto-status を表示する文法カテゴリーである。（従って、その機能を敢えて命名すれば nakto-stativ となる。）形態的には、語根重複 Reduplikation によって作られる語幹に、独自の完了語尾が付される。語根重複は母音 \*e- で行われ、語根部分は、強い形では \*o- 階梯を、弱い形ではゼロ階梯をとる。例えば、**6.** の例(1)に見た \*g<sup>w</sup>em 「踏む」（現在語幹は「歩いて行く」）ならば、3人称単数 \*g<sup>w</sup>e-g<sup>w</sup>om-e（>古インド jagāma）、3人称複数 \*g<sup>w</sup>e-g<sup>w</sup>m-re（古インド語は語尾 \*r̥ から > jagmúr）。語根重複は「到達・達成」を、完了語尾は「状態」を意味するものと分析される。

「状態」の一種であるから、本来は現在の特殊なものと考え得る。稀に、語根重複を欠き、語根に直接完了語尾を付して「状態」を意味する動詞がある。各個別言語によく残る代表例は \*uoǵd-e 「彼は知っている」（>古インド véda, ギリシャ oíde, 現ドイツ weiss など）。その他、若干の能力、状態を表す動詞が回収される。その中幾つかは「～な時期・期間中にある」という意味要素を示す点が注目され、今後さらに精密に検討する必要がある。例えば、\*d<sup>h</sup>ug<sup>h</sup>-e(i) 「彼／それは（今）有益・有効な状態にある」>古インド duhé 「（雌牛が）乳を出す」、ヒッタイト dukkāri 「彼／それは重要である」、ゴート daug 「…は役にたつ、できる」、現ドイツ taugen。これらを Stativ という文法カテゴリーでよぶことがある。（意味カテゴリーである Verhaltensart [→ **4. 2.** (1)] も、他に適当なものがないので、取り合えずは stativ とよぶが、将来区別できる用語を探すべきであろう。）この、語根重複を伴わない Stativ がどこまで独自の活用表 Paradigma を持ち、どの程度の語根・語彙に互って生産的であったかは未詳である。「到達した状態」を意味する完了 Perfekt の方は生産的であったと考えられ、動詞により、また個々の言語によって、「到達」の方に重さが置かれたり、「状態」のほうが決定的要素に（relevant に）なったりした。さらに、ゲルマン語の過去やサンسكريット（古インド語の後の形）の語りの時制に見られるように、「到達」から過去を示すカテゴリーに発展した。

### **8.** Modus 「話法」とその機能

Modus（複数 Modi）「話法」は、**1.** で少し触れたように、文の中味を形成する情報全体を話し手が受け手に渡す際の態度表明を表示する文法カテゴリーである。日本語の時枝文法が「詞」と区別して用いる「辞」と重なるところがある。態度表明の種類（＝「話法」の機能、意味カテゴリー）

には、報告（断定を含む）、可能性（推量を含む）、願望、意志、命令、未来などが挙げられる。報告には現在の事柄の報告と過去の事柄の報告とがある。現在語幹の「報告」の法に用いられる所謂「第一語尾」系列は「現在」という時の指定と、更に、「報告」とを表示すると解釈されることが多いが、下に「過去」について述べる所見により、「時」の指定がすでにその中に「報告」の意味を含むと考えるべきであろう。印欧祖語は過去—現在—未来という、「時」に関する対称的な組織を持たない。これらの「時」は Modus 次元の問題である。未来は Konjunktiv という Modus の一機能であり、「過去」はアウグメント Augment とよばれる一種の接頭辞\*é (>インド・イラン á-, ギリシャ é-) というサイン（形態素 morphem）で表示され、(3), (4)の Modi で表現される。

(1) Injunktiv 上記のような態度表明によって包まれない裸の文があり（**1.** に挙げた『(明日) 雨が降る』参照）、これも Modus の機能の一つに入れる。この機能（「ゼロ機能」）を担当する Modus を Injunktiv と名付けている。（Injunktiv の語のもともとの意味は「教令、命令に関する」で、ふさわしい命名ではないが、伝統的に確立しており、単なる符号として理解すべきである。）その機能は、単に文の中味を提出するだけのものなので、積極的に定義すれば、「言及」である。この点から、Memorativ（「想起法、言及法」）という命名も提案されている。また、主として形態面での特色から Primitiv（「基礎法」）という用語も提案されている。話し手の態度表明が状況や文脈によって既に与えられている場合や、そもそも問題にならない場合（例えば、履歴書や料理の教本におけるごとき、名詞講文との互換性がある文を思い浮かべられたし）などに用いられる。古インド語の最古層の文献リグヴェーダでは、かなりの程度生きたカテゴリーであり、（民族の）共通体験としての神話や普遍的真理に言及する場合など多くの用法をもつ。否定辞 má を先行させて用いれば「禁止法」となる（→ **5.**）。ギリシャ語のホメーロスにも残存形があり、その他の言語の中にも Injunktiv の語形を前提とする形態が収集される。現在語幹の Injunktiv と、アオリスト語幹の Injunktiv とがある。それぞれの語幹に直接「第二語尾」Sekundärendung（**9.** で触れる「態」の他に、人称と数のみを表示）を付加して表す。見方を変え（かつ、少し誇張が許され）れば、以下の(2)―(4)の『報告法』は Injunktiv に「時」の特定が加わったカテゴリーである、と言い直すことができる。

(2) Präsens Indikativ Indikativ は「報告」を担当する語法で、普通「直接法」と訳されるが、「報告法」がよいかと思われ、本稿ではこれを用いることもある。現在語幹の報告法は現在語幹に「第一語尾」（人称と数の組み合わせに加えて、現在の「時」を表示する語尾の系列、「報告」の機能については次項参照）を付加して表現する。結局「途中観」で観た「動作」の現在時点での報告（断定等を含む）であるから、厳密には現在進行形にあたる。正確には「現在語幹現在法」または「現在語幹現在報告法」である。

/ 説

(3) Aorist Indikativ アオリスト語幹は時間の広がりをもたない「全体観」に用いるものであるから、現在の報告法はもたない（作れない）。報告法といえば過去に関するものを意味し、「アオリスト語幹過去報告法」の意味で単に「アオリスト直接法（報告法）」とよぶ。アオリスト語幹の Injunktiv 語形（即ち、アオリスト語幹＋第二語尾）に過去を表す接頭辞\*é（アウグメント）を付して表す。形態の上では、過去の「時」を示すサインがあるだけで、特にこれを離れて「報告」を表示する形態要素は無いが、日本語文法でも、過去の助動詞が時枝文法でいうところの「辞」として機能することを考え合わせると、「過去」はすでにその中に「報告」という意味要素を包摂しているであろう。（このことは前項と導入部で述べた「現在」についても言えるであろう。「時」の特定なしには「報告」はなく、また、これが十分条件であって、これ以外の意味要素の添加は必要なかったであろう。）

(4) Imperfekt 現在語幹の Injunktiv 語形（即ち、現在語幹＋第二語尾）に過去を表す接頭辞\*éを付すると Imperfekt とよばれる「途中観」で動作を観た時の過去形となる。Imperfekt は一般に「未完了過去」、「不定過去」と訳されるが、もともとの意図するところを厳密にとれば「～していた」を意味し、過去進行形に近い。時の指定がそれだけで既に報告の意味を含む（前項）。Imperfekt は正確には「現在語幹過去法」または「現在語幹過去報告法」である。

(5) Konjunktiv 一般に「接続法」と訳される。「意志」を表す機能 voluntativ と「未来」を表す機能 prospektiv とを持つ。「意志」というのは話し手の意志のことであるから、現代語で解釈する場合には1人称と2・3人称とで異なってくる：「私は～したい」；「君は／彼は～すべし」＝「君が／彼が～することを（話し手は）要求・要請する」。（動作の主語 [行為者自身] の意志を表す場合、印欧祖語には、別に Desiderativ 「意欲語幹」という特別な形成法による現在語幹がある。「意志」の場合にも「動作」が実際に起こるのは未来においてであるが、「未来」という意味要素は「意志」の機能の場合には有意的 relevant ではない。）Konjunktiv は現在語幹にもアオリスト語幹にもあり、その語幹（Ablautがある場合には\*é-標準階梯の形）に接尾辞\*-e-（後ろに付く語尾によって\*-o-と交替；Themavokal とよばれる）を添加して Konjunktivstamm 「接続法語幹」を作る。これに人称語尾が付加されて活用形が完成するが、人称語尾には第二語尾ばかりでなく、現在専用の（従って、他には Präsens Indikativ のみに現れる）第一語尾も用いられる。もともとどちらか一方の語尾系列がどちらか一方の機能と組み合わせになっていたと考えることは正当であり、解釈も提出されているが、文献（インド、イラン、ギリシャ）に徴して証明することはできない。

(6) Optativ 「願望法」と訳されることが多い。話し手の「願望」を表す機能 kupitiv と「可能性」を表す機能 potential とをもつ。（「願望」を表す機能から派生して、「教令・当為」を意味

するときにも用いられ、これを特に präskriptiv 「規範的」とよぶことがある。) 現在組織にもアオリスト組織にもある。独自の\*-jeh<sub>1</sub>- (弱い形はゼロ階梯の\*-ih<sub>1</sub>-) という Optativsuffix を用いて Optativstamm 「願望法語幹」を作る。付せられる人称語尾は「第二語尾」系列である。接続法語幹と願望法語幹を総称して「話法語幹」Modusstamm とよぶ。「願望」が「意志」と区別されるのは、願望の場合、「動作」の発現の主体性が話し手にではなく、動作の主語(行為者)自体の中にあり、実行の可能性自体は行為者が握っているとする表現である点にある。

(7) Imperativ 「命令法」。現在とアオリスト両組織の2人称と3人称に存在する。2人称単数能動態の形態は語幹そのもの(つまり、語尾ゼロ:幹母音をもつ語幹 thematisch の場合)、またはそれに強めの Partikel 「小辞」起源と考えられる「語尾」が付くもの(幹母音の無い語幹 athematisch の場合)であり、それ以外の活用枠は Injunktiv 語形がそのまま用いられ、小辞起源の要素によって拡大された語形が主である。これらの「語尾」は命令法語尾と総称される。その他に、動作の起こる時期が指定されている文脈で用いる\*-tot を付した命令形が2・3人称全体に用いられる。

以上の Modus の中でも、話し手の態度表明の殊に明瞭・積極的な Optativ 願望法、Konjunktiv 接続法、Impertiv 命令法の三つを、狭い意味で Modus (複数 Modi) とよぶことがあり、それらに見られるような機能を modal 「話法的」と称する。Optativ と Konjunktiv の場合には接続辞を用いて Modusstamm (「二次語幹」と言う)を作り、他の場合には語尾や Augment によった。これらの話法は現在組織とアオリスト組織のものであったが、完了組織が報告法以外にどの程度の話法をもっていたかは未詳である。特殊な場合には modal な形態を作り得たとしても、組織として発達していたとは思われない。[ラテン語の完了形は完了組織の Indikativ 「現在報告法」(完了の「第一語尾」系列を伴った形)に由来する可能性があり、他の諸言語のそれは厳密にいうと Injunktiv 「言及法」(同じく「第二語尾」系列)の形から出ているとも考えられる。しかし、上に触れたように、時の指定が既に「報告」の機能をも含むものとするれば、ラテン語の完了形の基になった形は語尾だけを Stativ の「(現在)報告法」のそれで二次的に代置したものとも推測される。]

## 9. Diathese 「態」とその機能

印欧祖語の語尾 Endung には古い印欧諸語にも見られる通り、Aktiv 系列の語尾(「能動態語尾」)と Medium 系列の語尾(「中・受動態語尾」)の二大別があり、それによって区別される対立組織を Aktiv(um) 「能動態」と Medium 「中・受動態」とよぶ。この対立次元を Diathese と名付ける。おおまかに言って、Aktiv 語尾が代表的語尾であり、Medium 語尾はこれに更に付加的な価値を加えて表示するものと捕えられる。ただし、先に Medium で表現された状態動詞(例:「大きくなる」)に対して、Aktiv が行為動詞として(例:「大きくする」)、使役的に機能することがある。

(Medium という用語自体は、伝統的古典語文法で建てる Aktiv 「能動態」 と Passiv 「受動態」 の「中間」に位置する第三の態、という表現に由来する。)

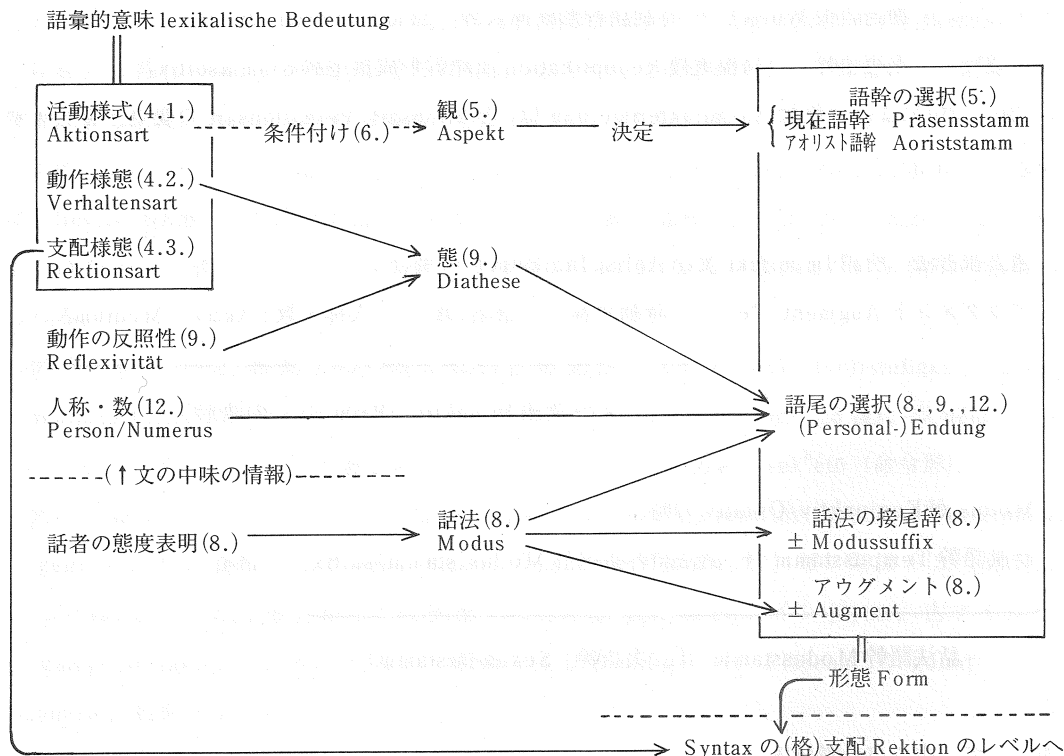
Aktiv は行為動詞 (Verhaltensart [→ **4. 2.**]) が facientiv であるとき) においては第一義的であり、推移・状態 (fientiv) や自動詞 (Rektionsart [→ **4. 3.**]) が intransitiv) に分類されると考えられる動詞にも多く見られる。

Medium 語尾には二つの起源が推定され、おおまかに言って三つの機能に分けられる。一つは、動詞が先ず Aktiv で表現されると、その行為または行為の結果・影響が主語自体に還ってくる場合にそのことを付加的に表示する役割である。この機能を一般に reflexiv 「反照的」と総称する。通常、(1) direkt-reflexiv (または単に reflexiv) 「直接反照的」：主語自身を直接目的語とする場合、例えば「我を忘れる」；(2) indirekt-reflexiv (または affektiv) 「間接反照的」：主語自身が間接目的語にあたる場合、例えば「自分に (自分のために) 服を買う」；(3) reziprok 「相互的」：2 以上の主語が相互に行為をしあうとき、例えば「(互いを) 讃えあう」, 「(互いに) 情報を与えあう」, の 3 カテゴリーを建てる。この項に関しても、分類に迷う中間的な場合は多くあり (例えば「自分の顔を洗う」, 「自分の服を買う」, 「自分で持って行く」), また 3 グループの下位に分類を設ける必要が起こることもある。無論、分類自体が目的ではなく、文法カテゴリー (語形) に現れる限りでの意味要素 noem を汲み上げればよいのであるが、(2) を「行為が何らかの形で主語または主語の領域中にあるものにかかわる場合」ほどに解釈しておく、取り合えずは、有効と思われる。

Medium のもう一つの機能と推定されるものに、(Aktiv 語尾による表現を前提とせず)に推移・経過 (fientiv, ないし場合によっては状態 stativ) の動詞に用いられる場合がある。それ以上の事情については下記 **12.** 語尾の構成の項を参照のこと。

「受け身・受動」(Verhaltensart の次元で patientiv の場合) にも Medium 語尾が用いられる。受け身用の特別な現在語幹を作らない動詞の現在組織の一部と、アオリスト及び完了組織の全体、更には二次的な現在語幹 (Desiderativ 意欲語幹, Intensiv 強意反復語幹など) では、Medium の語尾だけで受け身 patientiv の意味を表示する。

**10.** 語尾に関しては後にもう一度触れるが、現在組織とアオリスト組織について、以上の諸関係をまとめると：



11. これを形態論 Morphologie の面からまとめる。{ } 内は意味機能の表示である。

動詞の活用語形の基本構造は：

説

(I) 言及法, 現在直接 (= 報告) 法, 命令法の場合：

時制語幹 Tempusstamm + (人称) 語尾 (Personal-) Endung

{ 人称・数; Aktiv/Medium; ± 現在報告法; ± 命令 }

言及法 Injunktiv

現在報告法 Präsens Indikativ

命令法 Imperativ

Aktiv/Medium (Diathese) は Verhaltensart と Reflexivität によって決まる。

その際, 時制語幹 Tempusstamm (または「一次語幹」Primärstamm) =

- (1) 動詞語根 (Verbal) Wurzel [語彙的意味]
- (2) 動詞語根 Wurzel + 時制語幹形成接尾辞 Tempusstammsuffix

(2') 動詞語根 Wurzel + 時制語幹形成挿入辞 (Tempusstamm-)Infix

(2'') 重複語幹 = [語根重複 Reduplikation ± 語幹形成接尾辞 Stammsuffix]

(2)―(2'')による特色付け Charakterisierung は {Aktionsart, Verhaltensart の変更} を意味する。

(II) 過去報告法 (所謂 Imperfekt 及び Aorist Indikativ) の場合：

アウグメント Augment (\*é-) + 時制語幹 + 語尾(第二) {人称・数; Aktiv :: Medium}

＝言及法 Injunktiv (Primitiv) の語形

(III) Modus が Konjunktiv/Optativ の時：

時制語幹 Tempusstamm + 話法語幹接尾辞 Modus(stamm)suffix + 語尾

＝話法語幹 Modusstamm (「二次語幹」 Sekundärstamm)

説明として、主な点を挙げる。

1. 動詞語根 (Verbal) wurzel のもつ意味が、Aktionsart 活動様式において顕著に(a) durativ 持続的、(b) punktuell 瞬間的である場合、語根はそのままで(a)現在語幹 Präsensstamm、(b)アオリスト語幹 Aoriststamm として機能する。(a)を athematisches Wurzelpräsens 「語根現在」、(b)を athematischer Wurzelarist 「語根アオリスト」とよぶ。

例 1 (a) \*h<sub>1</sub>es 「存在する、ある」：現在報告法能動態 3 人称単数 \*h<sub>1</sub>és-ti > 古インド語 ásti, ギリシャ語 estí(n), ラテン語 est, 現代ドイツ語 ist, 現代英語 is, ヒッタイト語 e-eš-zi; 同じく 3 人称複数 \*h<sub>1</sub>s-énti > イン sánti, ギ eisi(n)/ēsi/, ミュケナイ = ギ e-e-si/ehensi/, ド sind。

例 2 (b) \*d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub> 「据える」：アオリスト過去報告法能動態 3 人称単数 \*é-d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub>-t > イン ádhat, cf. ギ ét<sup>h</sup>e-ka; 同じく 1 人称複数 \*é-d<sup>h</sup>h<sub>1</sub>-me > cf. イン ádhama, ギ ét<sup>h</sup>emen。

それ以外の場合には以下の手段によって加工・特色付け Charakterisierung を行う。

2. 現在語幹を作るための加工用の接尾辞 Suffix には、(1)\*-e-, (2)\*-je-, ((3)\*-ue-), (4)\*-éje-, (5)\*-ské- がある。これらは何れも\*-e- で終わっており、これを (語) 幹母音 Themavokal とよぶ。Themavokal \*-e- は後続する語尾によって\*-o- と交替する。これらの Suffix によって作られた語幹の活用の仕方を thematische Flexion 「幹母音付き活用」とよぶ。この活用では、活用表 Paradigma の内部で強弱の形が交替する Ablaut の現象は見られない。ただし、Suffix が付せられる語根の形その



をのに、(1)では\*é-階梯／ゼロ階梯／延長 (\*é-) 階梯, (2), (3)ではゼロ階梯 (/\*e-階梯), (4)ではゼロ階梯/\*o-階梯の別が (本来, おそらく機能の差を伴って) 存在する。(5)は常にゼロ階梯の語根に付く。最も単純に Aktionsart の時間幅を延長する為には(1)が\*é-階梯の語根に付して用いられ, 更に, 二次的な Aktionsart や Verhaltensart 「動作様態」の変化も加わると別の形成法が採用される。例えば, fientiv (状態) への変化が加わる場合にはゼロ階梯の語根+(2), iterativ (反復の Aktionsart) / e  
または faktitiv (使役の Verhaltensart) への転化があれば(4)がゼロ階梯または\*o-階梯の語根に付けられる。

例3 \*ueg<sup>h</sup> 「(を) 移動する」 現在報告法能動態 : \*é-階梯+(1) [vollstufiges thematisches Wurzelpresens] \*ueg<sup>h</sup>-e- > イン váha-ti (3単), アヴェスタ vazənti (3複), ラ uehō (1単), リトウアニア vežū (同), 古教会スラヴ vezq (同), cf. ギ (方言) vek<sup>h</sup>étō (命令形)。

例4 \*g<sup>ə</sup>enh<sub>1</sub> 「子をつくる」 現在語幹\*e-階梯+(1) [vollstufiges thematisches Wurzelpresens] \*g<sup>ə</sup>enh<sub>1</sub>-e-> イン jána-, 古ラ gene-; fientiv / patientiv 「生まれる」 ゼロ階梯+(2) [nullstufiges \*-ie-Präsens] : 現在報告法中・受動態 3人称単数 \*g<sup>ə</sup>nh<sub>1</sub>-ie-to<sub>i</sub> > イン jáyate, 古アイルランド \*gainethar; faktitiv 「子をつくる」 \*o-階梯+(4) [\*o-stufiges \*-éie-Präsens] : \*g<sup>ə</sup>onh<sub>1</sub>-éie- > イン janáya-, 古英 cennan。

例5 \*g<sup>w</sup>m-ské- [\*-ské-Präsens] → 6. の例(1)を見よ。

3. 現在語幹の形成法に Nasal infix 「鼻音挿入辞」とよばれる要素を用いるものがある [Nasalpräsens]。語幹を構成する子音要素 (Radikale とよぶ) のうちの最尾のもの直前に\*-né- (弱形\*-n-と交替) を挟む。主たる機能の一つは faktitiv (使役的) な Verhaltensart を表示することにあるが, そうでない重要語彙も多く, 未だに研究の余地が多い。語根の弱形に, 一種の Suffix, -néu-/nu- を添加して現在語幹をつくるグループもあり, 殊に, 「挿入辞」による形成の困難な, Radikale が2つしかない語根に用いられた (ないしは, 波及した)。

例6 \*ieug 「(馬, 車, 馬具など) を繋ぐ」 現在語幹能動態 3人称単数 \*iu-né-g-ti > イン yunákti; 同じく 3人称複数 \*iu-n-g-énti > イン yunjánti, この形を基に : ラ iungō (1単), リ jūngiu (同); cf. ギ zdeúgnūmi。

4. アオリスト語幹用には\*-s- [s-Aorist, sigmatischer Aorist], \*-e- (\*-o-と交替) [thematischer Aorist] がある。

例7 \*deik 「指し示す」 : \*d<sup>é</sup>ik-s- > ギ é-deiks-ā (アオリスト過去報告法能動態 1人称単数), ラ dīx-ī (同), アヴ dāiš (<\*d<sup>é</sup>ik-s-s 言及法 2人称単数)。

例8 \*ueid 「見つける」 : アオリスト過去報告法能動態 3人称単数 \*é-uid-e-t > イン ávidat, ギ eide, アルメニア egit。

5. Reduplikation 「語根重複」が用いられることもある。この場合、既に印欧祖語の段階で、さらに Themavokal を伴うこともある。

5. 1. Reduplikation が現在語幹形成に用いられるものを例で示す。

例9 \*d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub> 「据える」：現在報告法能動態 1 人称単数 \*d<sup>h</sup>é-d<sup>h</sup>oh<sub>1</sub>-mi [athematisches redupliziertes Präsens] > イン dádhāmi, ギ tít<sup>h</sup>ēmi (重複音節を \*d<sup>h</sup>i- で置き換え、語根の母音を \*-e- に平均化した形から)。

例10 \*per 「向こう側へ届く、渡る」：現在語幹 \*pí-por- > イン pípar-ti (faktitiv 「渡す」), ゴート faran 「移動する」, 現下 fahren。

例11 \*stah<sub>2</sub> (\*steh<sub>2</sub>) 「立つ」：同 3 人称単数 \*stí-sh<sub>2</sub>-e-ti [thematisches redupliziertes Präsens] > イン tīṣṭhati, アヴ hišta-, ラ sistit; (ギ histēsi は \*stí-stah<sub>2</sub>-ti から)。同様の形成法は上記

6. の例(3)。

重複音節は \*i- または \*é- によって、語根の語頭の子音一個または s + 子音一個を重複させて作る。もともとは \*i- は faktitiv (使役), \*é- は iterativ (反復) の機能を表す時に用いられたと推定されているが、実際の語形によって証明することは (もはや) できない。また、アオリスト完了組織、二次的現在語幹 (例えば cf. 下記 7.) 等における Reduplikation の機能・形態をも一貫して研究する必要がある。(「使役」は「達成」から派生したものかもしれない)

5. 2. Reduplikation がアオリスト語幹に用いられる例：

例12 \*uek<sup>w</sup> 「語る」：\*ue-uk<sup>w</sup>-e- [thematisch] > イン voca-, ギ eipe- (\*ue-ik<sup>w</sup>-e- [異化 Dissimilation を経過して])。

例13 \*klei<sub>1</sub> 「寄りかかる」：\*é-ki-klei<sub>1</sub>-t [athematisch] > イン áśisret 「(彼は～を) 寄りかからせた」 (faktitiv)。

6. Reduplikation は完了 Perfekt 語幹にも用いられ、その形成法は 7. で見た通りである。別の例を挙げる：

例14 \*leik<sup>w</sup> 「あとに残す」：3 人称単数能動態 \*le-loik<sup>w</sup>-e > イン riréca, ギ léloipe, ラ reliqu-it (語尾は二次的)。

例15 \*klei<sub>1</sub> 「寄りかかる」：3 人称単数中・受動態 \*ke-kli<sub>1</sub>-ei > イン śisriye (重複音節の i は同化による), 語尾 \*-toi<sub>1</sub> から出発して > ギ kéklitai。

7. Reduplikation は、その他、特殊な二次的現在語幹形成にも用いられる。即ち、

7. 1. Intensiv (強意・反復語幹)：語根全体を重複。

7. 2. Desiderativ (主語の意志を示す「意欲語幹」)：\*i- によって語頭の一子音 (または s

+一子音)を繰り返し, Suffix \* $h_1se-$  (語根が<sup>3</sup>Resonant = r, l, i, u, n, m で終わる時) または\* $se-$  (それ以外)を付す。

8. 過去報告法 (現在語幹/アオリスト語幹) [→II] はアウグメントによって示す。アオリストの例は例2, 例7, 例8, 例13に見た。現在語幹の過去報告法 Imperfekt は例1 \* $h_1es$  からは\* $é-h_1es-t$  (3単能), \* $é-h_1s-ent$  (3複能), 例3 \* $é-uég^h-e-t$  (3単能), \* $é-uég^h-e-to$  (3単中), 例4 \* $é-gēnh_1-e-t$  (3単能), \* $é-gēnh_1-ie-to$  (3単中), \* $é-gēnh_1-eie-t$  (3単能), 例6 \* $é-iuneg-t$  (3単能), 例9 \* $é-d^he-d^hoh_1-m$  (1単能), \* $é-d^he-d^hh_1-me$  (1複能), 例10 \* $é-pi-por-so$  (2単能), 例11 \* $é-sti-sth_2-o-m$  (1単能)の如くである。

9. Konjunktiv「接続法」及びOptativ「願望法」の語幹は時制語幹に, 話法語幹用の接尾辞を付して作られる [→III]。Konjunktiv用の接尾辞は [Themavokal] \* $e-/o-$ である。時制語幹がAblautを示す場合には (原則として) \* $é-$ 階梯の形に付す。人称語尾には第二語尾ばかりでなく, 現在報告法専用の第一語尾も現れる。

例16 現在語幹: 例1から:  $h_1és-e-t$ または $-ti$  (3単能) >イン  $ásat(i)$ , 古ラ  $esed$ , >ラ  $erit$  (未来形として), \* $h_1és-e-nt/nti$  (3複能) >イン  $ásan(ti)$ , ラ  $erunt$  (未来形, 二次的\* $-onti$ から); 例3: \* $uég^h-e-e-t/ti$  > \* $uég^h-ē-t/ti$  (3単能) >イン  $váhāt(i)^*$ , ラ  $uehet$  (未来形), \* $uég^h-o-o-me/mos$  > \* $uég^h-ō-me/mos$  (1複能) >イン  $váhāmas^*$ , ラ  $uehēmus$  (未来形,  $-ē-$ で平均化); 例6:  $iunég-e-t/ti$  (3単能) >イン  $yunájat(i)$ 。

例17 アオリスト語幹: \* $derk^h$ 「見やる」の athematischer Wurzelaorist から \* $dérk^h-e-nt$  >イン  $dársan$  (3複能); 更に, 例7から: \* $déik^h-s-e$ ; 例8から: \* $uid-é-e-t$  > \* $uid-ē-t$  >イン  $vidāt$ ; 例12から: \* $uég-uk^w-e-e-ti$  > \* $uég-uk^w-ē-ti$  >イン  $vocāti$  ( $vócati$ もあり)。

10. Optativ「願望法」の接尾辞は\* $ieh_1-/ih_1-$ である。

例18 現在語幹: 例1から:  $h_1s-iéh_1-m$  (1単能) >イン  $syām$ , ( $syāam$ , アヴ  $kiiēm$  < \* $h_1siéh_1m$ ), ギ  $eíēn$ , \* $h_1s-ih_1-mé$  (3複能) >イン  $syāmá$  (\* $símá$ に代わって, 単数の形に平均化), ギ  $eíēmen$ ,  $eíēmen$ ; 例3 \* $uég^h-o-ih_1-t$  > \* $uég^h-oi-t$  (3単能) >イン  $váhēt$ , \* $uég^h-o-ih_1-me$  > \* $uég^h-oi-me$  (1複能) >イン  $váhema$ ; 例6: \* $iu-n-g-iéh_1-t$  (3単能) >イン  $yuñjāt$ , \* $iu-n-g-ih_1-mé$  (1複能) >イン  $yuñjímá^*$ 。

例19 アオリスト語幹: 例17から \* $drk^h-iéh_1-t$  >イン  $drśyāt$  (3単能), \* $drk^h-ih_1-mé$  >イン  $drśímá^*$  (1複能); \* $gneh_3$  (\* $gnoh_3$ )「識る」: \* $gneh_3-ih_1-nt$  > ギ  $gnoíēn$  (3複能); 例12から: \* $ue-uk^w-o-ih_1-s$  >イン  $vocés$  (2単能)。(古インド語の s-Aorist の Optativ は, Aktiv では例外形を除き語根アオリストによって補填され, Medium でも機能上の要請によると考えられる形を中心に若干数存

在するのみである。従って、印欧祖語の段階での再建には資料が不足し、場合によってはその存在が疑問視される。)

## 12. 人称語尾 Personalendung について

既に諸処で触れた人称語尾を見る。人称語尾（簡略の為単に「語尾」を用いる）は(1)Aktiv「能動態」の系列と Medium「中・受動態」の系列と、(2)第二語尾 Sekundärendung の系列と第一語尾 Primärendung の系列と、の二つの二大別の枠組みのうちにある。(2)で第二を先に立てるのは、こちらが基礎となる系列であり、第一はそれに付加的な意味要素（「現在報告」）が加わったものだからである。ここでも、伝統文法から由来した用語に悩まされる。これらの枠組みの中にある一つ一つの具体的な語尾は全て、(1)の Diathese、の他に「人称」Person（1人称、2人称、3人称）と「数」Numerus（単数 Singular、双数 Dual、複数 Plural）を併せて表示し、(2)の第一語尾系列の場合だけ更に「現在+報告」が加わる。(名詞の語尾が「性・数・格」を表示して「格語尾」Kasusendung とよばれるのに対して、動詞の語尾は「人称語尾」Personalendung とよばれる。)例えば、\*t という語尾は [3人称]、[単数] と同時に [Aktiv 能動態] という、都合3つの意味要素を、\*ti は [3人称]、[単数] と [Aktiv]、[現在報告法 Präsens Indikativ] の4つを、\*to は [3人称]、[単数]、[Medium 中・受動態] の3つを、\*to<sub>i</sub> はそれに [現在報告法] を加えた4つを、同時に表示する、といった具合である。

再建される語尾の一覧表を呈示する：

第 人 称 1/2	Aktiv		Medium		Perfekt (Aktiv)	
	II	I	II	I		
単 数	1.	-m	-mi/-h <sub>2</sub>	-h <sub>2</sub> e	-h <sub>2</sub> e <sub>i</sub>	-h <sub>2</sub> e
	2.	-s	-si	-teh <sub>2</sub> s/-so (/·th <sub>2</sub> es)	-so <sub>i</sub>	-th <sub>2</sub> e
	3.	-t	-ti	-e/-to	-ei/-to <sub>i</sub>	-e
複 数	1.	-me (±m)	-mes/-mos	-med <sup>h</sup> h <sub>2</sub>	-mesd <sup>h</sup> h <sub>2</sub>	-me
	2.	-te	-th <sub>2</sub> e	-d <sup>h</sup> ue (±m)	-sd <sup>h</sup> ue(i)	-(t)e
	3.	-ent/-nt	-enti/-nti/-nti	-ento/-nto	-ento <sub>i</sub> /-nto <sub>i</sub>	-re (-er/-r)
双 数	1.	-ue	-ues	-ued <sup>h</sup> h <sub>2</sub>	-uesd <sup>h</sup> h <sub>2</sub>	?
	2.	-tom	-tos	?	?	?
	3.	-teh <sub>2</sub> m	-tos	?	?	?

再建形を意味する\*というサインは省略する。

母音の\*eは\*h<sub>2</sub>の前後では実際には\*aに変化している；\*sは有声音の前では実際には\*zである。

語尾の正確な再建と、その構成原理や前史については、これまでにいくつかの見解が提出されているが、必ずしも細部に至るまで明確になっている訳ではない。比較を方法とする再建 Rekonstruktion と、内的再建 innere Rekonstruktion (→ **2.**) によるその前史の考察とは別次元の営為であるが、その両次元を比較的無批判に行き来しての議論も少なくない。また、殊に前史の考察の場合、細部に付いて新しい信憑性のある所見が出てくれば、それが広範囲の見直しに波及することは大いに考えられる。

I の系列の語尾 (第一語尾) の表示する機能は II 系列の語尾 (第二語尾) の機能に「現在」という時の指定 (同時に「報告」, → **8.**) が加わったものであるから、上の表に列挙した I の列の語尾を一つ一つ分析してみて、それが左隣の対応する II の列の語尾 + x という形をしていないか、そしてその x という要素が「現在 (+報告)」のサインではないか、と考えることはごく正当な作業仮説である。事実、単数では、\**-m* と \**-mi*, \**-s* と \**-si*, \**-t* と \**-ti*; \**-h<sub>2</sub>e* (\**-h<sub>2</sub>a*) と \**-h<sub>2</sub>e<sub>i</sub>* (\**-h<sub>2</sub>a<sub>i</sub>*), \**-so* と \**-so<sub>i</sub>*, \**-to* と \**-to<sub>i</sub>*, \**-e* と \**-e<sub>i</sub>* の対立が発見され、I 語尾は II 語尾 + *i* と分析することができる。複数では一部 \**s* という要素が同様の手続きで回収されるように思われるが、それ以上の分析には不確定要素が大きい。印欧祖語は、その前史のいずれかの段階で、

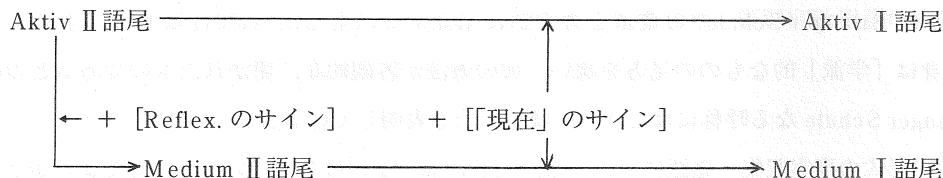
現在報告法は：(現在語幹) Injunktiv + 現在サイン,

過去報告法は：過去サイン (アウグメント) + (現在/アオリスト語幹) Injunktiv,

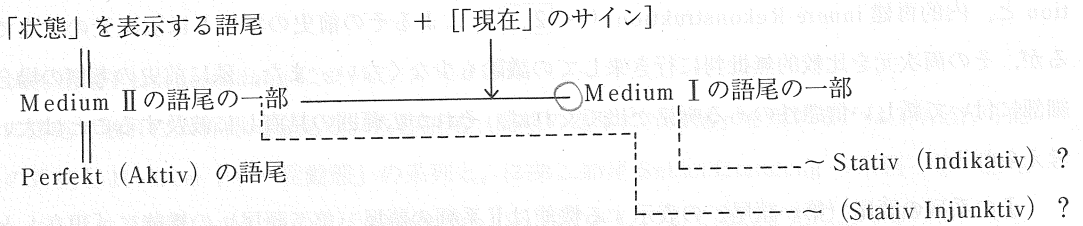
という対称構造をもっていたのかも知れない。その際、現在/過去の「時」の特定を表示する要素は「時の副詞」起源と推定されよう。しかし、例えそうであったとしても、現実に再建される第一語尾では、既に現在のサインは人称・数 (+態) を表示する要素と不可分に融合一体化してしまっており、過去報告法におけるアウグメントとは異なった様相を呈している。

次に、Medium 語尾という視点から観察すると、Medium の系列の中には Aktiv 形に何かを付加してできていると思われるものがある。例えば、Aktiv II \**-s* :: Medium II \**-so*, Aktiv I \**-s-i* :: Medium I \**-so-i<sub>o</sub>*。一方で Perfekt の語尾と Medium II との間には共通のものがある。例えば \**-h<sub>2</sub>e* (\**-h<sub>2</sub>a*), \**-e*。こうした個々の語尾の構成・成立史へ向けての分析が具体的な組立に成功するには資料が不足しており、比較言語学の再建の手続きや歴史文法の精緻さと比べると、単なる空想の領域と称し得るが、極く大筋を取って示せば：

(1) Medium の機能の中の Reflexivität (動作の主語へのはね返り, → **9.**) に関して、



(2) Medium の機能の中の「推移・経過」, 「状態」(→ 9.) に関して, 背後に Stativ 組織を仮定すれば:



のようになるかと推測される。完了組織 Perfekt においては, (最終的にはおそらく各個別言語の段階で) Aktiv と Medium の二系列に作り直されているが, その成立次第の検討も語尾全体の構成の分析に影響を与えるかもしれない。命令法も独自の「命令法語尾」をもつが, 8. の(7)で簡単に触れた。

13. 本稿で取り上げなかった点で, 動詞の形態論とその成立史の研究に重要と思われることの一つに Ablaut の形式 (Ablautschema) ないし活用形式 (Flexionstyp) とよばれる問題がある。Ablaut については始めの方 (2.), ことに小字の部分) で簡単かつ大胆に触れたが, その型・形式の問題とは, 具体的な活用語形が [動詞語根—土時制語幹接尾辞—土話法語幹接尾辞—人称語尾] という構成要素のどこにアクセントを保持して強い音節 (主として \*é.) を持ち, 他の部分がゼロ階梯や, \*o- 階梯になっているか, あるいは, どの部分の母音が延長されているか, を検討し, 活用の枠組み一つ一つの示すタイプを確認する仕事から出発する。このような視点は, ラテン語の名詞活用に関する H. Pedersen の論考によって明確化され (1926), ついで F. B. J. Kuiper がヴェエダ語 (古インドアーリヤ語) の名詞で取り上げ (1942), 1960年代から K. Hoffmann, H. Eichner (特に: Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 31, 1973, 91), J. Narten, G./Klingenschmitt, J. Schindler, H. Rix, N. Oettinger らを中心に, 理論的枠組みの設定の下, かつ形態全体にわたって検証され始めるに至ったものである。動詞については, Hoffmann, Narten, Klingenschmitt によるほか, 未だあまり正面から取り上げられていない。これらの「Erlangen の」研究者に批判的立場をとることが多く, 極めて伝統的な姿勢を取り続けてきた O. Szemerényi の Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft (第1版1970, 第2版1980) も1989年の第3版以降 (第4版1991), 名詞の活用タイプに関して「Erlanger Schule」の業績を肯定的に紹介するに至った (170頁以下)。[付言: K. Hoffmann 自身は「学派」的なものの見方を嫌い, 彼の方法が客観的な, 開かれたものであるとの確信から, Erlanger Schule なる呼称にはっきりと嫌悪の念を表明している。]

動詞の活用形式の事実収集・確認については, 大筋は明らかにはなっていると言ってよいと思われるが, 今後一層精密化が望まれる。更に, 活用形式の背後に潜む原理・動機の探求を通して, 印

欧祖語とその前史（諸）段階における動詞の形態・組織の研究をはじめ、広くアクセントの法則・原理や、語や文の構成原理の理解の為に、重要な視点が提供されることが期待される。この種の方向性の問題で、古くから知られている例を一つ挙げる。動詞\**h<sub>1</sub>es*「存在する」の現在語幹直接法（現在報告法）は単数では\**h<sub>1</sub>ésmi*, \**h<sub>1</sub>ési* (<\**h<sub>1</sub>és-si*), \**h<sub>1</sub>ésti*, 複数では\**h<sub>1</sub>smés*, \**h<sub>1</sub>sth<sub>2</sub>á* (<\**h<sub>1</sub>sth<sub>2</sub>é*), \**h<sub>1</sub>sénti*であり、アクセントのある\*e-母音の位置は単数語形と複数語形との間で異なり、統一的に説明できない。なるほど、できあがった語形だけを見れば、全て第一音節に\**é*があると「記述」し得るが、例えば1人称複数\**h<sub>1</sub>smés*は、\**h<sub>1</sub>és* + \**més*の中の、\**més*の\**é*だけが保持された結果と解釈すべきである。ところが、Injunktiv（言及法）を見ると：\**h<sub>1</sub>ésm*, \**h<sub>1</sub>és*, \**h<sub>1</sub>ést*; \**h<sub>1</sub>smé*, \**h<sub>1</sub>sté*, \**h<sub>1</sub>sént*である。これらは一番語末に近い位置の\**é*が保持された結果であると分析できる。3人称単数\**h<sub>1</sub>ést*は\**h<sub>1</sub>és* + \**t*であり、単数語尾\**-m*, \**-s*, \**-t*（の基になったもの）はもともと\**é*を持っていなかったと考えられる。3人称複数\**h<sub>1</sub>sént*は\**h<sub>1</sub>és* + \**ént*から、後ろの\**é*のみが保持されて\**h<sub>1</sub>és*の\**é*が消滅した結果と歴史的に分析される。つまり、\**h<sub>1</sub>es*のInjunktivでは、\**é*の（保持された）位置が単語全体の末尾の音節（末尾の実現可能性）ということで一定していた（Kolumneakzent「縦並びアクセント」であった）と推定できる。このことは、Injunktivが印欧祖語に本来からあったカテゴリーというに留まらず、歴史的に見て他のカテゴリーの基礎となった（Primitiv「基礎法」という用語を参照されたし）と考えることへの一つの論拠ともなる。

#### 記号の説明

- \* : 実際には在証されない、理論的再建形・推定形。
- > : 「～から～へ変化・展開」。
- < : 「～は～から由来、歴史的に展開」。
- i̯*, *u̯* : （音節構造上）子音の *i* (=y), *u* (=w)。
- ŕ*, *m̥*, *ŋ̥* : （音節構造上）母音の *r*, *m*, *n*。
- d<sup>h</sup>*, *g<sup>h</sup>* など : 氣息を伴った *d*, *g* など (Aspirata)。
- k̠*, *g̠*, *g̠<sup>h</sup>* : 硬口蓋を閉鎖位置にもつ *k*, *g*, *g<sup>h</sup>* (Palatal)。
- k<sup>w</sup>*, *g<sup>w</sup>*, *g<sup>wh</sup>* : 唇の丸めを伴って発音される *k*, *g*, *g<sup>h</sup>* (Labiovelar)。
- h<sub>1</sub>*, *h<sub>2</sub>*, *h<sub>3</sub>* : 印欧祖語に推定される三種の喉頭音 (Laryngal)。注記：母音\**e*が\**h<sub>2</sub>*ないし\**h<sub>3</sub>*の直接隣り（前後）に位置する場合には、既に印欧祖語の段階で、\**a*ないし\**o*に変化して（「染められて」）いる。